

浄土

1988-10

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（通称省 特別授賞記録誌）第三五号
昭和六十二年九月二十五日印刷
昭和六十二年十月一日発行
第五十四卷
十月号





十月の秀句

秋空にひとり日暮れて一周忌

飯田 龍太

秋雲の厚きところは山に触る

篠原 梵

天高し身弱くして氣負ふかな

木村 蕪城

十月号



譬えば百千種の楽を、同時に俱に
作すがごとし。

——『阿弥陀経』

目次

法話

お十夜法要に因んで(上)……………金子寛哉……(2)

ずいそう (1)

播州龍野にて……………戸川靈俊……(9)
——もう一つの哲学のみち——

<連載>

現代の生命問題を考える(下)……………藤木雅清……(17)

=にこここ法話⑥=

運動会迫る……………長谷川岱潤……(23)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <19>

海と山の狭間で……………木下隆一……(30)
——我が思い出に住む犬たち(5)——

◇◇特別連載①◇◇

法然上人と中里介山(上)……………須藤隆仙……(37)

表紙絵 小林治郎画

(話)

お十夜法要に因んで(上)

(法)

金子寛哉

(大正大学講師)



一、十夜法要の典拠よりとれる

お十夜法要の声を聞くと秋の気配も次第に色濃くなつて来る。農家にとってはあわただしい穫り入れの時期でもある。地方によってはその時期をはずして独自の日時を定めて行なう所もあるようである。

このお十夜法要の典拠となつたのは言う迄もなく「この娑婆世界で十日十夜善根功徳を積むことは、み仏の世界で千年善根を積むの

にまさる」という、「浄土三部経」の中心となる『無量寿経』巻下の説にもとづくものである。このお経文中の「善根功徳行」とは、浄土宗を開かれた法然上人の教えによると、南無阿弥陀仏とお念仏を称えることだと言われている。それは法然上人の著書である『選択本願念仏集』第三章段に「念仏は是れ大善根なり」「念仏は是れ勝善根なり、其の義まさに知るべし」と述べられていることから明らかである。つまり、我々の行なうことの

出来る善根功德行は種々あるが、それらの中で最も功德が大きく、最も功德が勝^{すぐ}れているのは南無阿弥陀仏と称えるお念仏の行であるという意味である。

お十夜法要の典拠となった経文として、今一つあげられるのは『阿弥陀鼓^く音^{おん}声^{しょう}王陀羅尼^{だわらに}經』である。その文には次のように記されている。

若しかの仏の名号を受持する有らんに、その心を堅固にし、憶念して忘れざること十日十夜、散乱を除捨し、精勤して念仏三昧を修集してかの如来を知り、憶念相續して断絶せしむるなかれ。……かの仏を礼敬し、正念を堅固にして悉く散乱を除き、もしくはよく心をして念々に絶えざらしめんに十日の中必ずかの阿弥陀仏を見る……

とある。『無量寿經』の文では同じく十日十夜のことを説きながらも、どちらかと言うとこの娑婆世界で善根功德を積むことのむずかしさと、それ故にまたそれを為すことのすばらしさを中心に説くのに対し、今の文では念仏行者がお念仏行を行なう時の心がまえと、その実践の仕方を中心に述べられているように思われる。

これらの経文によると十日十夜の間心を堅固にして、わき目をふらずに念仏行をつとめ、功德善根を積むのは念仏行者自身の境涯を深め、この娑婆世界での生涯を終えてのち、浄土往生が確かに得られると言う確信を得るため（自利）の行であったように思われる。このような受けとり方は法然上人の教えにおいても基本的には同じである。つまり、お十夜の念仏行は浄土の信仰を持つ念仏行者自身の為の行であり、その念仏行によって得られる

功德善根は、その他の行によって得られる功德よりはるかに「多」であり、しかも「勝」であるということになる。

このような個人の念仏行(自力)を中心に考えた場合、思い合わせられるのは『阿弥陀經』に説かれる次の文である。即ち、

舍利弗よ、若し善男子善女人あつて、阿弥陀仏を説くを聞いて、名号を執持しゅうぢすること若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日、一心不乱なれば、其の人命終みんごうしゅうの時に臨んで心顛倒せず、即ち阿弥陀仏の極樂淨土に往生することを得。

と説かれている。ここではお念仏行を實踐する日時が七日とあつて、十日十夜とはなっていない。しかし、一心不乱にお念仏の行を實

踐することによって積んだ功德により、その念仏行者が命終の時には間違ひなく、阿弥陀仏のまします極樂淨土へ往生することが出来るのだという、その筋道は明確に示されているわけである。

このように、お念仏の教えの依り所になるお經文を中心に見た場合、それ等は全てその念仏行者自身の為の行としての性格が中心となつて説かれている。

それは兎も角、今日淨土宗寺院で種々行なわれている年中行事の中で、お十夜の法要は以上見た經文等からもうかがわれるように、淨土宗の教えにもっとも良く合致し、他の宗派の寺院には見られない淨土宗独自の法要であると言ふことが理解出来る。

以上、お十夜法要の典拠となつた經説、及びその趣旨について見たのであるが、このような經説の主旨に基づいて、お十夜法要が行

なわれるようになった、そもそのゆえんは一体どのようなことであつたのだろうか。

二、真如堂の阿弥陀様

室町幕府の第六代將軍足利義教（一四二九—四一）の時、執権職にあつたのは平貞経である。その子に貞国さだくにと言う人があつた。貞国は父貞経と意見が合わず、この世の榮達は望み薄しと見て、京都の東山にある鈴声山真正極樂寺の真如堂に籠って三日三晩の別時念仏を行ない、第三夜の明けると同時に出家することゝ覺悟を決め、お念仏の行に励んだ。

所が、その第三夜の明け方の夢に高僧が現われ、「汝今世こんぜ・後世ごせ、我れを頼む心偽りなし、来世は必ず超世の願に任すべし、されど今世のことは今三日を待つべし」と告げられた。その翌日將軍義教の命によつて貞経は執権職を解かれ、貞国がそのあとを継ぐことと

なつた。この真如堂での貞国にまつわる奇瑞のことが將軍義教の耳に入り、將軍の命によつてその後七日七夜の間真如堂で別時念仏を行なうこととなつた。この前三日と、後の七日を合せて十日十夜の法要となり、このことのあつた十月に、比叡山の常行三昧堂で行なわれていた「引声念仏」と「引声阿弥陀經」を毎年行なうこととなつたのである。

このように貞国が自分の生涯を決すべく生命をかけて念仏行に励んだ真如堂とは一体どのようなゆかりを持つお寺であつたのだろうか。

真如堂の寺歴を見ると、永観二年（九八四）比叡山の僧戒算が常行堂の仏像を東三条女院、藤原詮子（円融天皇の皇后、一条天皇の生母）の願により、神樂岡東の離宮に移し、その離宮を寺としたのに始まると言う。従つて、この寺は開創当初から、比叡山に伝わる念仏三昧

と深い因縁を持つ寺であり、引声念仏、引声阿弥陀経等が伝承されるべきゆかりも推測出来るわけである。

その後五百年間はこの地にあり、応仁の乱（一四六八）の時この附近一帯が東陣となった為焼失し、御本尊は比叡山の黒谷へ難を逃れ、その後は大津や京都市内を転々と移動された形跡がある。しかし、貞国が真如堂で奇瑞を得たのは將軍義教（一四二九—一四一）の時であるので、応仁の乱の前に当り、旧地（現在の境域の東北）のままの場所であったことになる。

このお堂に奉安される御本尊は三国無双の阿弥陀如来ともいわれ、また「頭振り」の阿弥陀、領ずきの弥陀とも呼ばれている。この阿弥陀如来の立像は約一メートルの寄木造りで、慈覚大師円仁が中国に九年間留学し、のち比叡山に帰って四種三昧行を行なう時の本

尊として造立されたものである。ところが、この仏像が完成し、最後に「修行者（四種三昧行）のための護り本尊となつて下さい」と言つて、眉間に白毫を入れようとした所、その像は頭を横に振られたので、慈覚大師は驚かれ、白毫相を入れぬまましばらく為すすべもなかった。数日経つて慈覚大師はまた阿弥陀如来像に向つて、「それでは山を下つて都へ行き、一切の人々を救済して下さい。その中でも特に女性をお救い下さい」と言われると、その仏像が頷かれたと言われる。

このようなことがあつてから五十年程して戒算上人が夢のお告げによつて女院の離宮に安置されたのである。このような伝承を持つ阿弥陀如来像であつたので、当時一般民衆のこの像に対する信仰の念も殊の外厚かつたのではないかと思われる。

三、平貞国のお籠り

浄土宗第三祖良忠上人の門下には六派があった。その中の一条派ちいせ礼阿れいあの門弟もんていに向阿証賢きやうけんと言う人がいる。師には『三部仮名鈔』(一三二—一三三頃)と言う著書がある。それは『帰命本願鈔』三卷、『西要鈔』二卷、『父子相迎』二卷の全七卷からなっている。証賢は和歌文芸に秀いでた学匠であって、京都の公家や武家、文人等の信者も多かったようである。『帰命本願鈔』では京都の真如堂に参籠し、夢中に聞いた修行者と老僧の問答に託して、末世の衆生は阿弥陀の本願に帰依し、称名念仏によって浄土往生を願うべきことを勧めている。また『西要鈔』では嵯峨清凉寺釈迦堂において夢中に現われた修行者と多くの士女との問答に託して浄土宗の安心起行あんしきぎやう、撰取不捨せんしよなどの教義について述べている。そし

て『父子相迎』では阿弥陀を慈父に、衆生を子に譬えて釈迦・弥陀二尊の遣迎せんぎやうによって浄土に往生し、父子あい遇うて喜ぶ厭離穢土えんりていど・欣求浄土きんきうじやうどについて述べている。

つまり、証賢がこれらの浄土の教えを説くために用いられた参籠の場所が、京都の「真如堂」と「釈迦堂」であったことになる。これは当時の人々の浄土教信仰のあり方を考える上で注意されなければならない点である。しかもこれら三部とも、当時の一般の人々や女性にも親しみ易い、平易な和文をもって説かれていたのである。したがってこれらの書が当時の人々に及ぼした影響は非常に大きかったものと思われる。

これら三部の書が隆堯りやうぎやうによって出版されたのが、応永二十六年(一四一九)といわれ、平貞国が真如堂で別時念仏を行った少し前に当るのである。

これら三部の書の構成といい、その場所（舞台）といい、刊行された年時といい、十夜法要のゆかりとなる平貞国が父との意見不一致から真如堂にお籠りして高僧から夢告を受けると言う、伝承説話の条件は全て整っていたようにさえ思われる。つまり、当時における真如堂は、貞国のような立場に立ち到った多くの人々のお籠りの場所でもあり、また念仏三昧という行を通しての祈願所でもあったのではなからうか。貞国が真如堂にお籠りをし、靈瑞、奇瑞を得たと言うのは、それだけを取り出して見ると、如何にも経説が先行しそれに付会した説話のようにも受け取られがちであるが、実はそうではなくて、証賢の『三部仮名鈔』に見るような浄土の教えが一般民衆にまで広く浸透し、行なわれるべくして行なわれた貞国の参籠であったように思われてならない。

そしてしかも、平貞国の別時念仏によって得た奇瑞は、当時の人々にとって、念仏による現世の利益の現証そのものとして受け取られていたのではなからうか。時の一国の元首たる將軍義教の命にはって、その後七日七夜の別時念仏会が行なわれたと言うのも、このような当時の社会全体にかもし出されている雰囲気を感じさせるのである。

勿論、十日十夜は最初に述べたように経説に基づくのであるが、以上見て来たように平貞国の行実を中心に見ると、前三日は現証を得るに到る自行（自力）であり、後の七日は現証を与えられたことに対する阿弥陀仏への報恩行と言うことになる。この後の七日の行は言う迄もなく前述した『阿弥陀経』の説に基づくものと思われる。

（つづく）

ず・い・そ・う (1)

播州龍野にて

—もう一つの哲学のみち—



戸と
川が
霊れい
俊しゅん

(京都・左京区西住院住職)

山陽本線姫路駅から、姫新線に乗り換えて数駅を過ぎると約三〇分で本龍野駅である。時間によれば、市庁舎の屋上から流れてくる龍野の生んだ天才詩人を謳われる三木露風の「赤とんぼ」の夕やけ小やけのメロディが訪れる旅人の旅愁をそそる——

夕焼小焼の

赤とんぼ

負はれてみたのは

いつの日か

(略)

夕焼小焼の

赤とんぼ

とまっているよ

竿の先

龍野は、全国に幾つかある小京都の一つでもある旧城下町である。山紫水明を京都の特徴とするなら、小京都の山は東山になぞらえ、川は鴨川になぞらえられる。

龍野の地もまた山は麗わしく水は清い。鴨川になぞらえる揖保川は鴨川よりも流れゆたかに、水は清冽である。東山になぞらうべき赤松氏以来の居城であった鶏籠山そして白鷺山の翠巒は、播磨野にその姿は麗わしい。ただ景観が美しいというだけでなく、揖保川の水は、大和三輪のそれに匹敵する揖保素麺を生み、銚子、小豆島と鼎立するほどのこの国の代表的な醤油龍野醤油を産んでいる。

そして、何よりも私が小京都龍野をこよなく愛するのは、幸いに戦災を受けなかったせいもあるが、古い五万三千石の城下町が今もなお、その古きよき面影をとどめていること、そのはしほしに都の文化を偲ばせるものを残しているからである。

京の香りの偲ばれるということ——そのことは、歴代の藩主脇坂氏が、京都所司代を勤め朝廷に奉仕し、京の花道、茶道と交流が篤かったことのせいもあるうし、殊にその現われの一つが、歴代藩主の上屋敷の跡なる聚遠亭にも窺われよう。その庭園の心字池は京都

仙洞御所のそれを心に画いて営まれたものとされる。池にはり出す茶亭は、京都所司代の日、時の藩主が孝明帝から拝領したものともつたえられている。藩主の嗜んだ宗偏流茶道は、藩侯の本流茶道としてのみでなく、今もこの城下町に生きづいているという。

「五万石でも脇坂様は、花のお江戸で智恵がしら」

その始祖を賤ヶ嶽七本槍の甚内安治とする脇坂家は、藩祖安政が信州飯田から移封されて十代、約二百年、明治の廢藩置県に到るまで龍野を治めたというから、そして、その間、何代もの藩主が、京都所司代の大任を仰せつかったというから、和やか藩風のうちに京文化が、京趣味が城下に浸透していったこともむべなるかなであろう。

脇坂家は、始祖が豊臣氏の郎従であっただけに、徳川政權では、当然に外様であったはずであるが、始祖安治自らが、徳川の重臣堀田氏の出自であったせいで、譜代の処遇で、老中にも参画したものもある。

脇坂家の菩提寺如来寺は津土宗西山禅林寺派である。西本願寺の信心の汎く流れる播州路であるが、浄土宗西山派それも永観堂禅林寺の流れも多い。鶏籠山を真背後に、怡かも鶏籠山の居城をおろがむかのような容で、美しく流れるような屋根の御堂は建っている。堂の余間には一段と高く「輪ちがい」の定枚の歴代藩公一統の靈碑がまつられている。

堂前には三木露風の筆塚がある。

カトリック詩人露風は、この寺のために、

松風の清きお山にひびきけり

こころすむらん明らけくなり

と歌をのこしている。

正を幾つも連らねたような、白壁の小路、中には崩れかけた風情のものもあるが、その小路の間から、今にも侍姿が忽然と現れて来そうだ。家老の門、二番家老の邸、そのほか藩士たちの古い屋敷を残してこの龍野から、露風ばかりでなく数多くの傑出した人物が生れている。

この理由は、いろいろあろうけれど、その基底には、五万三千石の小藩龍野の、隣りの大藩酒井十五万石姫路藩に対する敗けじだましいの対抗意識が、祖先から脈々と伝わっているのだからか。学業の世界にあっても——たとえば、

藩校敬楽館の流れを汲む旧制龍野中学校（今は旧龍野高等女学校と併合して龍野高等学校）

このことは、お隣りの備前池田藩への美作津山藩、したがって哲学者出陣を生んだ旧制津山中学とも思い合わされるのである。

龍野公園のあたりから桜三千本の道の畔にかけて、文学の小径というのが続くのであるが、この小径に建つ数多の碑を見てゆくと尾道の文学の碑の径に劣らぬ、此の地龍野生れの文学者達の存在とその遺業が偲ばれてくるのである。

嗚呼玉杯に花うけて

緑酒に月の影やとし

治安の夢に耽りたる

栄華の巷低く見て……

むかしの青春の憧れであった旧制一高の寮歌「嗚呼玉杯に」の作者矢野勘治もまた後年東大に進んだ旧制龍野中学校を母校とする一人である。

文学者の碑の並ぶ文学の径と離れると、白鷺山の丘の径である。

この丘にただひとり哲学者三木清の碑が立っている。龍野の人は、この三木清の碑が立つ丘の径を哲学の小径と呼んでいる。龍野に生れ、真実の哲学の道に生き、非業の死を遂げて逝った郷土の生んだ此の国の秀れた哲学者に贈るこよなき呼び名であろう。

彼の遺影と、彼の詠んだ歌、

しんじつの

秋の日てれば

せんねんに

心をこめて

歩まざらめや

のレリーフが、半月形の碑におさめられて私達に迫っている。碑の前から眺めると揖保川が白く光って内海にむかって蛇行している。眼下には、彼の母校旧制龍野中学校の後身である龍野高等学校の学び舎が見える。彼の後輩の高校生のボールを打つ音、ときめく歓声

が聞こえてくる。

年経て、再度哲学の径を訪れた時には、彼の遺友たちによって、彼の「人生論ノート」から撰ばれた「怒について」の文章が、碑に刻まれて、そばに建てられていた。

「今日、愛については誰もが語っている。誰が怒について真剣に語ろうとするのであるか。怒の意味を忘れて、ただ愛についてののみ語るということは今日の人間が無性格であるということのしるしである。切に義人を思う。義人とは何か。——怒ることを知れる者である」「人生論ノート」より

私が生涯において初めて彼の風貌に接したのは、彼が「パスカルにおける人間の研究」を携げて吾が論壇に登場した三高講師の頃である。ちょうどその頃は彼がドイツ留学から帰朝して間のない頃、次の「唯物史観と現代の意識」の考察が練られていた頃とも思う。龍野中学の彼の後輩で、西本願寺派の寺の出身の某君の紹介で、彼は私たちの学生の集会に出てくれたのである。

その時、恐らく彼は、自著のパスカルについて、恩師の西田哲学について、ドイツ留学の恩師ハイデッガーについて歴史哲学を説いてくれたのであろうが、ようやく、哲学とか思想とかに眼覚めかけようとする未だうぶな高校生の頭脳に、彼の熱情こめて語る論旨が理解できたであらうか、どうであらうか。

数十年を経て、ふり返ってみると、この優れた哲学学徒の魁偉——怖ろしいという意味でない——な、男らしい容貌に、何か一種の哲学を魅するもの、そして哲学に魅されたも

のの不可思議な存在感が想い起されるのである。

旧制一高から京大哲学科へ——それは、この国で初めての哲学と謳われる「善の研究」の西田哲学を慕ってであった。こうした例は彼と殆んど同期の西谷啓治や後進の矢内原伊作にも窺い知ることが出来るが。

彼が西田幾多郎の後継者とされていたかは知らない。しかし西田哲学の所謂京都学派の秀れた一人である彼は恩師に遠ざけられることとなる。それには異性への愛情の問題が原因しているようであるが、そのことは、却て彼の人格を大きく広くするものではなかったかとひそかに私には思えるのである。宗教哲学の波多野精一先生は、この英才の進退について非常に惜しまれたとも。法政大学哲学科に迎へられてからの、東京における業績の素晴らしさは、いや私の挙げるまでもない。

彼について、私が特に教えられるのは、時の流れとともに、ファッシズムに与みし、ナチの軍門に投じた恩師ハイデッガーに対して、「理性の権利を回復せよ」と叫んで決別して、真の真理を愛する者の精神に生き貫ぬいたということである。

——大学に課せられた義務と奉仕は勤労奉仕、国防奉公、国民の付託に応える為の知識奉仕の三つである。そして、この三つの要請のためには、大学の自由さえドイツの大学から除外されるであろう。何故ならば大学の自由とは、常に否定的であるから不当である——

（フライブルク大学総長ハイデッガーの弁）

大学人として、この誤謬を犯したハイデッガーは、速刻に反省し、大学総長の座を辞して故郷シュワーベンに退き、故郷シュワーベンの生んだ薄倅の詩人ヘルダーリンの研究に、己が生涯の思想の一転期を画したことは有名である。

後年、ハイデッガーを訪れん日本の学人に、そのかみ彼のマールブルクの日の弟子三木清が、終戦の日に獄中で死んだという篤い父清助、母しんの営む古い三木家の家風か、おのづと彼の意識に深く根ざしていったのであらう。

「私の落着いていくところは結局、浄土真宗であらう」

大経の「独去 独来 独生 独死」の経文のごとく、パスカルの「ひとはただ独として生きゆくであらう」の言葉のごとく、この国の誇るべき哲学者三木清は時代の夜明けを待たず死んでいった。

彼が学窓の日、師とともに、友とともに歩んだ東山の「哲学の道」は、今は有名な観光の対象と化し去っているが、ここ播州の哲学の径こそは、三木清を考え、三木清とともに哲学するの径で、いつまでもいつまでもあつてほしい。

眞実院釈清心墓

彼の古い生家、さらにほど近い静かな小丘に眠る彼の墓——それへの辿りが更に哲学するの径と続いてほしい。

現代の生命問題を考える（下）



藤^{ふじ}木^き雅^が清^{せい}

（D・E・S
臨死問題研究会座長）

五、個々の選択が求められる時代

前回、倫理問題の根底に基盤がないことを指摘したが、その基盤に宗教を求めることは

もちろん、個々の生命問題における選択も、すべて個人個人がするもので、なんびとたりともこれを阻害したり強制したりするべきではない。ということとは、一人ひとりにかかりした生命観が求められていることになる。

そして宗教も。

宗教界は、そして教団は、人びとの選択の指針となるべき見解を示すべきである。見解を示して人びとの審判を受けるべき時なのかもしれない。ここ一、二年、第三次宗教ブームということで、とくにオカルト的な新・新宗教が若者の間でファッション的に受け入れられているが、このようなものも含めて「正当なもの」と「いかがわしいもの」との正邪が峻別されていくのだろう。はたしてこの厳しい審判の前で、歴史的な重みだけで安穩としていられるだろうか。

以下、この選択の問題について、具体的な事例を掲げて考えてみたい。

六、脳死と臓器移植における選択

「死」の問題を考えることは、「生」を見つ

め直すことだと前回述べた。同様のことが脳死問題についてもいえる。脳死状態を経て死ぬ人は、死亡者全体の一パーセント弱であるから、脳死問題は特殊なことのようなだが、ここ数年、判定基準について、また脳死を人の死と認めるかどりかということについて、どの死の問題よりも多く、しかもさまざまな立場から、さまざまな角度から議論が重ねられてきた。そのため、死の問題の多くが集約的に語られており、脳死問題を例にして考えることはきわめて有効なのである。

以下、筆者が作成した「脳死と臓器移植に関する意識チェックリスト」を掲げる（○印は質問、△内はその選択肢、傍線は筆者の選択、※印は質問を説明したもの）。

1 脳死について

○医学的（生物学的）に個体死であることを認めるか△はい・いいえ・わからない▽

※本年一月十二日、日本医師会生命倫理懇

談会は、「脳死は「個体死」とみなして

よいであろう」と見解を発表している。

○精神的に死と思うか／はい・いいえ・わからない

※筆者は、身体的、精神的、社会的な側面の死が満たされてはじめて人の死といえ
ると主張している。

○社会的に死と思うか／はい・いいえ・わからない

○人間の死と思うか／はい・いいえ・わからない

○延命措置の積極的・消極的な中止の目安としてよいか／はい・いいえ・わからない

○臓器移植をしてもいいか／はい・いいえ・わからない

○本人の意思があれば死としてよいか／はい・いいえ・わからない

○家族の意思があれば死としてよいか／はい・いいえ・わからない

2 臓器移植について

○臓器移植そのものに賛成か／はい・いいえ・わからない

○自分がドナー（提供者）となることに賛成か／はい・いいえ・わからない

○自分がレシピエント（被提供者）となることに賛成か／はい・いいえ・わからない

※脳死を条件にするしなにかかわらず、

前三問は対象とする臓器によって答えが異なる人もいるであろうことを考慮すべきである。たとえば、腎臓や肝臓の移植ならいいが心臓の移植はいやだという人がいるかもしれない。

脳死・臓器移植の問題には、ざっと掲げただけでもこれだけの選択がある。個々の現実

の場面では、さらに複雑な問題が生じるだろうが、個人の選択ということでは、このように整理しておくことが必要であろう。新聞などのアンケートのように、脳死・臓器移植に賛成か反対かといった二者択一の問いには、筆者などはなんとも答えようがない。この問題では、このような単純なアンケートで賛成が何パーセントになったなどといってもあまり意味がない。

そこで、つぎに問題を明確にするためのポイントをいくつか掲げることにする。

まず、質問によっては、つぎの三つの側面からの答えが生じる場合がある。

- ① 自分がそのようなケースに遭遇した場合
- ② 近親者や友人がそのようなケースに遭遇した場合

- ③ 一般論としてはどうか。また、他人が選択したことに対してはどうか

例をひいてみよう。日常「人間は自然に任せるべきだ。他人の臓器を貰ってまで生き延びようとは思わない」といつている人でも、自分の子供が移植以外に助かる道がないとなったら、考えが変わるかもしれない。①では反対、②では賛成となるが、これは個人のエゴだといって責められることではない。当事者の論理と傍観者の論理はズレるのが当然である。それが人情というものであろう。であるからこそ、他人の痛みがわが痛みのごとく感じられ、行動できるのが尊いのであろう。

また、③については、臓器移植のように、他人が提供したり受けたりするのを第三者としてどうこういえない場合と、脳死問題の反対論者のように、他人が選択することすら認められない場合とがある。それはそうだ。脳死を人の死と認めない人からすると、脳死状態はまだ生体であるし、そこからの臓器摘出

となると殺人行為とすらなるからである。

つぎに、このようなテーマが法律になじむかという問題がある。一部の法制化の動きに對しての検討課題である。現行法に照らしてみると、まず「角膜及び腎臓の移植に関する法律」がある。しかし、この条文には「死体から」と謳われており、この法律に肝臓や心臓の項目を追加しても、脳死が人の死かどうかという問題をクリアせずに移植に踏み切ることはできない。参考までに法律では死をどう規定しているかというと、心臓死（三兆候による確認）を謳っているわけではない。戸籍法、医師法で「医師が判定する」とあるだけである。つまり、医師が、医師の専門家としての信念で判定すれば、心臓死であろうと脳死であろうと、それは法律的には人の死なのだ。判定の内容については謳っていない。だから、脳死推進派の医師が、プロフェッショ

ナルな医師として脳死を人の死であると確信しているならば、脳死をもってどうどうと判定すればよいと思う。それをせずに、昨今の議論のように「社会的コンセンサス」などを要件にしたり、推進派の人たちを集めて見解を示しても、遠回りするばかりで、かえって不信心はつのるばかりであろう。

つぎには、プライバシーの尊重と公開性という問題がある。わが国初の心臓移植を手がけられた和田寿郎氏は、「患者さん（提供者・被提供者）のプライバシーを守ろうと必死になったが、マスコミが強引に公表してしまった」と語られた。このプライバシーの保護は大切な要件であるが、いっぽう、密室の医療行為であってはならない。これはほんの一例である。もし、これからわが国で臓器移植をやっていくというのなら、このような周辺の問題を整備することが求められよう。

おわりに

以上、前号では今日の生命問題について、その現状と位置づけを述べ、本号では死の諸問題がもっとも象徴的にあらわれている脳死問題について、臓器移植の問題を含めてわれわれの選択という視点から述べてきた。

例にあげた脳死・臓器移植の問題でも、紙幅の関係で詳述できなかったが、本稿では、なるべく私見を控え、問題点の整理紹介に終始した。読者諸兄に生命問題の一端を提起せんがためである。

かかる問題については、大きな視座から、新しい時代を乗り越える叡知の模索こそ最重要課題であり、また、宗教界はその対応のいかんによって真価を問われているということを重ねて指摘しておきたい。

(了)

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟理事
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁

定価一、六〇〇円（千二百五十円）

五 月 書 店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九―三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇―二四六三

運動会迫る

「膝を大きくあげて、ハイ、イチニイ、イチニイ、元気よく」

先生の大きな号令が今日も校庭に響きます。ミーちゃんたちは、ここのところ毎日運動会の練習です。

「おとうさんやおかあさんが見に来てくれたときに、恥をかくのは君達なんだぞ。隊列が揃わないとみっともないじゃないか。さあも

っと元気よく腕をあげて」

ミーちゃんの大嫌いな行進の練習が、延々と続きました。

「私、こんな練習大嫌い」

長い練習がやっと終わって、教室でミーちゃんが投げ捨てるように言いました。

「毎日毎日校庭を歩き回されて、まるで馬鹿みたい」

はせがわ
長谷川 岱 潤
じゅん

(東京・品川区戒法寺住職)



「こんなこと毎日させられていたら、運動会が、ちっとも楽しみじやなくなっちゃうわ」

カヨちゃんも、トモチちゃんもミーちゃんに同調するように続けて言いました。

「でもさ、カッコよく歩けないと、おかしいんだからしょうがないよ」

ユミちゃんが口をさします。

「ユミちゃん、そんなこというけど限度があると思わない。一週間放課後毎日行進の練習だよ」

「そうだよ、恥をかきたくないのは先生のほうでさ、私たちの親は、こんな行進なんか、ちっとも期待してないよ」

「うちの親もそう思うなあ。何処にいるかわからない行進なんかより、徒競争で一等になることのほうが、よっぽど楽しみだっていつも言ってるよ。勉強で一等は無理だからね」

「それならさ、鬼ごっこでもして、かけっこ

の練習でもするほうがよっぽどいいわね」

カヨちゃんの言葉に思わずユミちゃんもものつてしまいました。

「でもさ、私今度の運動会は一等になる自信ないんだ」

「カヨちゃんの組すごいよね。ミチちゃんとかノリちゃんとか強豪ぞろいだもんね」

カヨちゃんの珍しく弱気の発言に、ミーちゃんが付け足して言いました。

「カヨちゃんはいいわよ。私今度ビリになったら親に合わせる顔ないわ」

トモチちゃんは深刻な顔です。

ミーちゃんたちの学校では、徒競争は前もって順位を決め、速い人は速い人同士、遅い人は遅い人同士で走る事になっているのです。そしてカヨちゃんはいつもクラスで一等なので、一番速い人の組に、そしてトモチちゃんはその逆なので、一番の遅い人の組に入っ

ているのです。

「私今度ビリだったたら、正真正銘の学年のビリってことじゃない。そうなたらどうしよう」

「トモちゃん、大丈夫だって、ビリになんかならないよ」

「そんなことないって、この間いっしょにビリだった子、運動会休むなんて言ってるのよ。うちの親はそんなこと許してくれそうもないし、ほんとにあぶないのよ」

「こんな、速い順に走る徒競争なんて、絶対おかしいわよ」

カヨちゃんが力強く言いました。

「そうよね、背の順でいいのよね」

一番背の低いユミちゃんも続きました。

ミーちゃんは、自分の中ぐらいなので何とも感じていなかったことも、カヨちゃんやトモちゃんにとっては大問題なんだなあと思ひ

ました。そしてよく考えると、何だかとてもよくないことのように思えてきました。

「どうしてこんな走り方するんだろう」

ミーちゃんはわからなくなっていました。
「そりゃあ先生たちは、速い子と遅い子がいっしょに走ったんでは、余りにも差がついちやったとき、遅い子が可哀想だからって、思っているんじゃない」

ミーちゃんたちの後ろで黙って座っていた、ゆきえちゃんがぼそって言いました。

「速い子と差がつくのは当り前で、恥かしくないわ。それより、遅い子のなかでもなお遅かったら、恥かしくていられないのよ」

トモちゃんが訴えるように言いました。

「トモちゃんの言うことは、トモちゃんの立場にならないとわからないことなんだよ。先生には到底無理なんじゃない」

ゆきえちゃんが余りにも冷やかに言うので、

みんなはびっくりしてしまいました。

「カヨちゃんだって、当然一等になれるとはわからないし、先生たちっておかしいね」

ミーちゃんがやけくそになってそう言うのと、みんなも家に帰ることになりました。

夕方ミーちゃんが宿題をしていると、お父さんとお母さんが何やらごそごそと、机をだしています。

「お父さんたち何してるの」

「今日はいいい天気で、ほら月があんなにきれいなんだよ。だからお月見をしようと思つてさ。ミーちゃんも手伝ってくれよ」

「今日、十五夜なの」

「十五夜は先月にもうすんじやつたよ。ほんとはあさつてが十三夜なんだけど、天気が心配でね。あさつても天気よかつたらまたやろう。何回やつたつていいじゃないか」

「お父さんはこういうの好きね」

縁側近くに机を出して、今日はテレビを消して、みんなで月を眺めながらの夕食です。

「たまにはこういう夕食もいいねえ」

お父さんはお酒を一杯やりながらご機嫌です。でもミーちゃんはなんとなく浮かぬ顔をしています。

食事も終わり、ミーちゃんは後かたづけを手伝いながら、お母さんに学校での話しをしています。

「お母さん、そんな徒競争変だよね」

「トモちゃんの気持つて、言われてみないとわからないわよね。そういう方法が間違っているかどうかは、お母さんにはわからないけど、確かにトモちゃんの子は可哀想だし、カヨちゃんみたいな子は気の毒ねえ」

「それでしょう、絶対おかしいわよ。平等のように見えて、とんでもない差別だと私は思うわ」

「わあ、こわい。そんな難しい言葉何時覚えたの」

「えへん、でもそうでしょう」

「ミーちゃん、何お母さんを困らせているんだ」

縁側からお父さんの声がしました。

「ほら、お父さんがさみしがっているわよ。行つてあげなさい」

「ハ―イ、お父さん聞いてくれる」

ミーちゃんはお父さんに運動会の練習の話
しや、徒競争の話しをみんなしました。

「ほんとだね、そりゃあしゃべつた」

「しゃべつ、つて何」

「仏さまは差別つて書いて、しゃべつて読むんだよ。そういう区別する必要のない区別のことを、しゃべつていうんだよ」

「ふーん、難しいな」

「たとえばさ、ミーちゃんが電車に乗るんで

お金を払うとき、おサイフの中にきれいな十
円玉と、古くて汚い十円玉があったら、ミ
ーちゃんはどおする」

「そおそお、そういうことつてよくあるのよ
ね。もちろんきれいなお金は残して、汚いお
金から使うよ」

「そういうのを、しゃべつていうんだよ。
だって、どちらも同じお金で、十円は十円で
しょ。価値に違いはないんだよね」

「でも、お金収集している人っているでしょ
う。そういう人にとっては違いがあるんじゃない」

「するどいな、そこなんだよ。一般的には全
然区別する必要のないことを、無理に区別し
て、そして順位をつけていること、それがし
ゃべつなんだ。十円はどんな十円でもお金と
して使うときには、みんな同じ価値なんだよ
ね。でもそうやって、その製作された年の枚

数など、お金としての価値ではなく、ものとしての価値という全然違ったところで区別するといったことは、十円玉というものだから許されることで、人間にあてはめたらとんでもないことなんじゃないかな。人間は絶対してはいけないことって、仏さまは言っているよ」

「徒競争も、そうだよね」

「そうだと思うね。体育の競技会じゃないんだから、学年で順位なんかつける必要ないと思うね」

「ハッキリ順位がでちゃうもんね」

「ミーちゃんあの月をみてごらん。月はね、大きな海だろうが、小さな池だろうが、そうその洗面器だろうが、何処の水にだって何一つ変わらずきれいな姿を写しているだろ。仏さまはちょうど月のようなんだ。そして海や、池や、洗面器にあたるのが我々人間なん

だと思うんだ。いろんな人間がいるけれど、仏さまはみんな同じように照してくれているんだ。仏さまが何一つ区別していいのに、我々人間同士が区別したらおかしいんだよ」

「でも、競争って必要でしょ。競争すれば順位がでちゃうよ」

「競争自体は悪くないよ。唯、順位にこだわる必要は何もないんだ。順位はその時、その場所だけのもので、その人間を決めるものではないんだ。途中の手段や、努力が問題で、結果はどうでもいいんだよ」

「私たちどうしたらいいの」

「今更そうしたやり方は変わらないだろうから、ミーちゃんたちが今お父さんが言ったことをよく肝に銘じて、順位なんか関係ないって確かめておくことだね」

「わかった。それしかないか」

ミーちゃんはうなだれながら答えました。

待望の新刊

宮林雄彦編

『仏事と信仰生活・浄土宗』

◇◇◇ 浄土宗の檀信徒には必携の書!!

◇◇◇ 平明な記述と豊富なイラストによるあかるい装丁の本!!

四六判美装本 一四二ページ

定価八〇〇円 (〒二〇〇円)

△発行・発売△ 図書出版(有)群書

〒170 東京都豊島区巢鴨四一七一六―四〇三

TEL (〇三) 九一七―八四一一

(振替) 東東七―一六八七五九

木

下

隆

一

随

筆

集

19

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(5)—

木の
下
隆
一

一見して結核患者と分かる青年は、腕組みをすると、どういうつもりか、

「僕の部屋で、お茶でも飲みませんか」

と、私を誘った。言葉は丁寧だが、態度はかなり横柄だった。

「ご覧の通り、僕は肺を患って目下療養中の身です・君は結核という病気が怖いですか」
そう言って青年は値踏みするような目で、じっと私の目を見つめた。もしちょっとでも私の目の中をためらいの色が走れば、青年は皮肉に唇を曲げて笑ったかもしれないが、
「いえ、別に……」

と私が答えたので、青年はおやつという風に、私の目を見つめなおした。

「珍しい人ですね君は。大人でも大抵は気味悪がって、僕の誘いを断るものなのに」

「祖母も結核で亡くなったし、僕自身小児結核でしたから」

「なるほど。結核に対しては免疫があるという訳ですか」

「さあ、それはよく分りませんが……」

「まあいいでしょ。ついていらっしゃい」

青年は先に立って覚束ない足どりで歩き出すと、

「M島の療養所で、長年寝てばかりいたので、どうもまだ歩行に自信が持てないのですよ」と、自嘲とも弁解ともつかぬ口調で言った。

青年の部屋は、拝殿の左側の奥まった所にある六畳程の板の間であった。拝殿とは短い渡り廊下で結ばれていたから、祭祀の際の準備室か、或いは更衣室にでも使われていた部屋であろう。南面する窓の下に机が、そして西の壁際には低いベッドが置かれており、東側の壁面は、天井まで五段の本棚がしつらえられていて、ぎっしり本が詰っていた。殆どが私が初めて目にする本であった。

机の横に置いてあった大振りの瀬戸の火鉢を部屋の真ん中に移すと、青年は押し入れから座布団を一枚取り出して、

「どうぞ」

と、私の方へ押しやり、火鉢に懸っていた藁缶の湯を急須に注ぐと、しばらく黙ってお茶の葉の開き具合をはかっていた。そして二つの湯呑み茶碗に注ぎ分けると、青年はまた、

「どうぞ」

と言って私にその一つを勧め、突然、

「君は石川啄木を知っていますか」

と尋ねた。

「東海の小島の磯の白砂に……の啄木ですか？」

「そう。——あれは啄木の第一歌集『一握の砂』の巻頭の歌ですから、大抵誰もが知っている。その他にはどんなのを知ってる？」

急に言葉遣いがぞんざいになったので、私は内心ほっとして、正座の膝をくずして胡座をかいた。

「あと知っているのは、たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず、だけです」

「まあ、そんなとこだらうね。しかしこれからの少年はもっと文学に親しまなければならない。文武両道と言いながら、文の道をないがしろにしたから、敗戦という悲惨な結果を生んでしまった。これからは文の道一筋で、敗戦国日本の再建を図らなければならない。それには先達のすぐれた書を多く変んで、自らの教養を深めることに努めなければならない」

小声ではあったが、完全にお説教であった。啞然としている私を尻目に、青年は本棚から一冊の小冊子を抜き出すと、

「まずその手始めにこれを貸してあげるから、いいなと思った歌をノートにでも書き写すといい」

と言った。手渡されたのは「石川啄木全歌集」であつた。書き写せと言われたって、そんな余分なノートを私は持っていなかったから困惑した。粗悪な藁半紙でさえ貴重品だった時代で、私はそれを綴じてノート代りに使っていたのである。

「僕は『一握の砂』よりも『悲しき玩具』に収められている歌の方により心引かれるが、その訳は次の機会に説明しようと思う」

それを聞いて、そろそろ帰れということかなと、私は思った。窓の外にはいつか暮色が迫りつつあつた。立ち上がりかけて、

「あのう、僕、木下隆一と言います。リュウは法隆寺の隆、イチは漢数字の一です」と名乗りをあげると、

「これは失礼。僕は有武一郎。父はこの教会でこの地区の分教会長をしています。母はその補佐役。一人息子の僕は無為徒食、哀れですね」

と笑つた。

「ハチのことについて、少しお聞きしてもいいですか」

上げかけた腰を下ろして私が言うのと、一郎は訝しげな目を私に向けた。

「今日学校で、昨日天理教の教会の下に越したと言うと、チハのいる教会かと、殆どの奴がハチのことを知ってたんです」

「そうですか。——実はね、僕はあいつのことはよく知らないですよ。初めて僕がM島の療養所に入ったのが昭和十五年の秋、紀元は二千六百年、と日本中が浮かっていた時ですよ。福山の中学を出た翌年でね、僕は高校受験に失敗して、この家に帰っていた。その一年ほど前から時々血痰が出ていたが、僕はさほど気に留めていなかった。しかし、初めて咯血した時、間の悪いことに母に見られてしまつてね、それで強制的に療養所に放り込まれてしまった。それからしばらくして『息子さんがいなくなつてお淋しいでしょう』つて信者の人が連れて来たのがハチだったんだね。乳離れして直ぐだったというから、生後せいぜい五十日かそこらじゃなかったのかな。秋田犬の子だというので、渋谷のハチ公のような立派な犬になれと願つてハチと名付けたらしいんだが、まさかあんな大きな犬になるとは、父はともかく母は想像もしていなかったようだよ」

「じゃあ、ハチはいま六歳つて訳ですね」

「そうなるかな……そうだね、そうだ」

一郎は指を勘定していたが、

「犬の六歳と言へば、人間の何歳ぐらいに相当するんだろう」と呟いた。

「五十歳ぐらいじゃないですか。近いうちに図書館にでも行って調べて来ますよ」
私が言うと、

「初老か、多分そんなとこだらうね。そういえば、あいつこの頃なんとなく動作が鈍くな

ったような気がする。昭和十七年の春、小康を得て僕は一度ここへ帰って来た。その時がハチとの初対面だった。二歳にもなっていなかったんだなあ、あいつ。いまはもうその頃の面影はないが、きりっとした、頭のいいかなかの美犬でしたよ。しかし、僕には懐かなかったな。ハチにしてみれば、所詮僕は他所者でしかなかったんだ。主人夫婦と犬一匹の平穏な生活の中に、突然主人と対等の口を利く変な奴が現れたのだから、心中穏やかではなかったに違いない。月に何度か会合があつて信者が集まるが、その人たちには尻尾を振つても、僕には決して振らなかった。完全に無視されてた。名前を呼んでも、ずっとそっぽを向いちゃったりしてね」

「いまでもそうなんですか」

「いや、昔ほどではなくなった。老境に入ったせいかもしれないね。——おや、すっかり暗くなってしまった」

立ち上がって、一郎は電灯をつけて言った。

「今夜もまた螢電灯になるんだろうね」

当時、電力は極度に不足していた。水力発電に頼っていたから、特に冬場の渇水期には不足した。電力会社は一晚に何度か家庭に供給する電力の電圧を下げて、急場を凌いでいた。電圧を下げると、電灯はすうーと暗くなり、白光は赤っぽい光に変わり、その頼りない光では、本を読むことも出来なかった。暗くなったり明るくなったりするので、世間ではいつかこれを螢電灯と呼ぶようになっていた。予告なしに螢電灯になるのにも弱った

が、いざ蛍電灯になると、いつ元に戻るのか全く見当がつかないのには参った。電球自体粗悪だったこともあるが、こういう無理な負担をかけていたので、実によく切れた。電球もまた貴重品だった。

「切れた電球の修理法知ってる？」

一郎は奇妙なことを言った。

「切れた電球を注意深く振っていると、切れたタングステン線がくっつく。すると点灯可能になる。そう長くは持たないがね……。一度試してご覧」

有武一郎は、私の文学の目を開いてくれた最初の人であった。私にプロレタリア文学を読めと勧めたのもこの人だった。たった十歳ほど年上に過ぎないのに、実によくいろいろな事を知っていた。こんな彼との出会いも、ハチという犬が介在していなければ無かったのである。

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴いたしております。小林先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

《特別連載①》

法然上人と中山介石（上）

須藤 隆仙

（函館市称名寺住職）

はじめに

文士の方で法然上人を非常に讃仰なされた方は多くおられ、本誌『浄土』と特にご因縁の深かった吉田絃二郎先生や、文壇の大御所佐藤春夫先生などが、つとに有名であります。が、ここにお話を申し上げる中里介石先生は、これまた、ものすごい眼力で法然上人を論じられた方として有名であります。しか

し、今日ではこの中里介石先生の話も、いささか前世的となり（中里先生は昭和十九年数え年六十歳で没）、若い人などには馴染が薄くなつたように感じられます。

そこで今回、編集部から何か書くようにと頼まれましたので、「法然上人と中里介石」というテーマで書いてみたいと思います。もとより充実したものなど書けるはずがありませんが、私なりに考えてみました恥しい一文で

す。

大乘小説

私が小さい頃、『大菩薩峠』という映画がありました。『中里介山全集・二十卷』の年譜を見ますと、介山不朽の名作『大菩薩峠』の映画化は、昭和十年に第一回が日活映画でなされ、翌十一年第二編が出ております。戦後はたしか昭和二十八年に東映で作られ、主役の机竜之助を片岡千恵蔵が演じたはずですし、その後も市川雷蔵（大映）や仲代達矢（東宝）などのものがあつたように記憶いたします。

中学生のとき原作を読みましたが、正直のところ、何が何だかさっぱり解りませんでした。ただ小説といえは多く文語体であつたのに、これは口語体で、しかも初めが「大菩薩峠は江戸を西に距る三十里、甲州裏街道が甲斐国東山梨郡萩原村に入つて、その最も高く最も險しきところ、上下八里にまたがる難所

がそれです」という、あの何ともいわれぬ上品な語り口、それだけが今も頭の中に残っております。

さて、介山の代表作であるこの『大菩薩峠』について、その評価を、例えば小学館『日本百科大事典』で見えますと、次のようにあります。

「大正二年から昭和九年まで『都新聞』に断続的に発表された。江戸時代末期を背景に、大菩薩峠をはじめ江戸・京都・大和（奈良）・紀伊（和歌山）など全国各地を舞台として、すべてに興味を失い、音無しの剣をふるって人を切ることにしか喜びをみいだせない主人公机竜之助をはじめとして、どこか社会への反抗的姿勢と、虚無的なものをもつ数多くの人物が織りなす大ロマンである。大正十年ごろの恐慌による社会不安がおこると、この竜之助的感情が世間に共感をよび、一般にもてはやされるように



——『大菩薩峠』の挿絵——

なった。」

また『広辞苑』には、次のようにあります。

「中里介山の長編小説。大正二年九月都新聞に発表、以降断続十年、のち東日・国民新聞などに連載。わが国未曾有の長編。作者死亡のため未完。時代を幕末にとり、盲目の剣客机竜之助を主人公にし、仏教思想の上に立つ。大衆文学の先駆。」

ここで当然注目しなければならないのは、このニヒルな人斬りを描いた長編小説が、じつは仏教思想を基盤にしているという点であります。

そこで少し専門的なものにとっても、『仏教文学辞典』（武石彰夫・菅沼晃編、東京堂出版）というのを引いてみましたら、作品『大菩薩峠』を次のように説明してありました。

「はじめ時代小説としての発想が強かったが、しだいに人間世界の業や恩讐の念を越えた新しい次元を描こうとする大衆小説にいたり、人間曼陀羅を意図した作者の仏教理念を見ることが出来る。他に、史伝的手法で法然像を描いた『黒谷夜話』『文覚』などがある。」

事実『大菩薩峠』の巻頭には、著者（介山）の次のような宣言が付されているのであります。

「この小説『大菩薩峠』全篇の主意とする処は、人間界の諸相を曲尽して、大衆遊戯の境に参入するカルマ曼陀羅の面影を大凡下の筆にうつし見んとするにあり。この着想前古に無きものなれば、その画面絶後の輪郭を要することは非無かるべきなり。読者、一染の好憎に執し給ふこと勿れ。至嘱。著者謹言」

もうこれが、仏教小説であることは、評者の言をまつまでもなく、このように介山自身、明言しているわけであります。

また、人々はこれを「大衆小説」としましたが、介山自身は「大乗小説」と呼んだのであります。

浄土教的なもの

さて、このようにして、中里介山の小説は、いわば仏教小説であるわけですが、これについて、介山全集十五巻に橋本峰雄氏が「介山と仏教」という解説を書いております。なかなか注目すべき解説であります。この橋本峰雄という方は、学者さんであります。が本業は浄土宗の坊さんであります。

橋本先生は先年亡くなりましたが、徳島県出身の方で、京都大学哲学科在籍中に学徒出征し、復学卒業後、郷里で療養中に仏教に感銘し、昭和三十年浄土宗の僧侶になられた

お方で、神戸大学の教授を勤める傍ら京都の浄土宗の寺の住職をされ、のちにはかの住蓮・安樂あんらくで有名な京都鹿ヶ谷しかがやの法然院の住職もされました。『宗教以前』『うき世の思想』『くらしのなかの仏教』その他、多くの著書があります。

この橋本先生が「介山と仏教」という一文を書いておられるわけですが、大体、次のようなことをいっておられるのです。

「介山は仏教思想に立つ作家であった。介山は十歳の頃に仏教的史観でつらぬかれた『平家物語』を愛読し、仏教的な無常観を知った。この無常観は介山にとって、彼の一家の崩壊離散の体験ともあいまって、身についた皮膚感覚のようなものであった。介山はここから出発し、彼の仏教はこういう無常感ないし無常観から出て、あとはそれを超える、あるいは包摂する、絶体者ないし全体者を、仏教のなかでどのように見

出すかが彼の生涯の問題であったといえる。

介山は、十七歳で郷里の小学校の代用教員をしていた時には、キリスト教を信じて村に教会を作ったり、十八・九歳の頃には社会主義をとって、その傾向の雑誌に執筆したりしたが、それも仏教思想の枠のなか、あるいはそれを土台とした上での新思潮の摂取であったのである。

介山は社会主義者であったのが、幸徳秋水らの大逆事件のために仏教に転向して『大菩薩峠』を書いたのだとの説もあるが、じつはすでに十九歳頃に禅寺へ参禅したり、二十二歳で都新聞に入社してから三教合同生活（仏教中里介山・キリスト教秋元小羊・神道宮沢一）と称する合宿生活をしたりしていたのであって、少くとも仏教は介山の政治的転向の逃げ場所ではなかったのである。社会主義から仏教へではなくて、仏教思想の上での社会主義であった。それであ

ればこそ、昭和十年代の日本ファシズム狂乱の中で執筆された『大菩薩峠』の終りの数巻が明らかに示しているように、介山は社会主義的あるいはアナキズム的志向を堅持し続けることができたのである。そして、介山の仏教は、禅なども勉強したとはいっても、そこには断念があつて、結局の形では法然流の浄土仏教が介山の安心の場所であつたのだ。

介山には『黒谷夜話』といつて、法然上人を描いた長篇の史伝小説があるが、この作品を介山は、実弟の幸作にむかつて「あればかりは、いま読んでも、冷汗をかかずに読める唯一のものだ。いまではとてもあれだけのものは書けない」と述懐したという。彼がいかに法然に心酔していたかがわかる。

介山はまたある人に、「法然上人などという大人物になると、とてもそのまゝは書けない。ぐるりから攻めて行つて、その上

にボートと浮かす。つまり、点描のような形をとらなければ、書けるものではありません」と語ったという。この言葉が、介山の仏教が、結局のところ法然上人のそれであつたということを、如実に示しているわけである。”

この最後の某人に語つた小説法然上人についての手法の話、これは大変重大な発言でありまして、このことについては、アレツと思われようなおまけもついているのですが、そのことは後に述べることにします。

右のようにして、橋本先生は、介山の仏教思想というものは、つまるところは「法然上人の浄土教」なのだ、といっておられるわけであります。先生は前に述べたとおり、京都大学で哲学を学んだ方でありますから、深い考察力の上からの結論でありましょうが、しかし、人それぞれの考えでありますから、これに異を立てる方もおります。

柞木田龍善たけぎだりゅうぜんという方が、宗教新聞『中外日報』の昭和五十三年六月二十九日付から十回にわたり『中里介山の宗教思想』と題して執筆しておられますが、その中で柞木田氏は、橋本先生の介山浄土教説を排して、浄土教ではなく華嚴の思想こそが、介山の仏教なのだ、と主張しております。これも確かにうなづける一論ではありますが、しかし、華嚴の仏教というのは、実際は浄土教なのであります。これについては後に述べます。

介山の法然上人作品

さてここで、中里介山が法然上人に関する作品をどのくらい作っているか、そのことを少し見てみたいと思います。以下、介山全集二十巻所収の執筆目録のお世話になります。

○『室むろの遊女』明治四十四年(二十七歳)十二月から翌四十五年三月まで『都新聞』に発表。『法然上人行状絵図』から採つ

て、熊谷次郎直実・津戸三郎為守（武蔵国の御家人）、それに播磨国室の泊の遊女ら、法然上人に化導された異色の人たちを結び合わせ、念仏に帰依するさまを描いて、法然上人の教えの偉大さを語る作品。橋本峰雄氏は「津戸の三郎の弟、津戸の七郎という人物を発明することによって、この一篇を構想した介山のストーリー・テラーとしての手腕はすでに並々ではない。そして法然の教化の物語のなかから特に室の遊女をとり出して、物語をそこに集約してゆくという発想は、きわめて介山的であったということができると評し、また「受容的・諦観的な人間のあり方を描いている。つまりそういう意味における仏教を描いている」という。最後の結びが印象的であり、法然上人の教化の清浄さがよく表われているので左に転記しておく。

「上人の御船が、室津の港に着いた時、

友君は自ら棹を取って、小舟を寄せ、我等が如き罪業深き身が、如何にせば往生を遂げ得べきぞ、教え給えと、身を投げ出した時、法然上人は、大慈の眼を大悲の色に湛えつつ

「弥陀如来は、さような罪人のためにこそ弘誓をもたてたまへる事にて侍れ。ただ深く本願をたのみて、あえて卑下すること勿れ。本願を頼みて念仏せば往生うたがいあるまじ」とねんごろに教え給う。

室の遊女は斯うして仏門の人となり、一すじに念仏し、臨終正念として往生を遂げ、その髪を下ろして行いすましていたあとは、今も尼屋の浦というて、室津港の一角に残る。

熊谷次郎が死んだのは、その翌々年。渋谷の小次郎は、相模国へ帰って、これも出家入道した。

津戸の三郎は武蔵国に念仏所を建立し

一心に念仏を修業する。」

○『安楽』（脚本「念仏停止」）大正三年元旦号の『日本及日本人』に発表。『大菩薩峠』が『都新聞』に大正二年九月から連載されはじめた直後である。梗概に次のようにある。「法然以前、日本の宮廷と知者とは宗教があった。法然以後、凡夫と愚人とに与えられた浄土の法門は如何。平安の政治が鎌倉に移る時、清盛と頼朝との表裏の門を辿って、その時代の外廓を捉え得た者があったとする。其処に物足らぬ感じがあって、外廓を一步踏み越えて、内殿の奥へ奥へと進んで行く時、端なく法然に打著かるであらう。源平盛衰のもたらした専修念仏の新信仰——法然の宗教は今日如何様に伝えられておるか知らない。われ浄土宗を立つる心は凡夫の報土に生きることを示さんが為なり」の声と、それに伴う真に大なる姿

は、古今を論ぜず、彼の宗教を是とするものも、非とする者も共に仰いで之を見るより外はない——念仏停止は彼の宗教改革のカタストロフィーである。八句に迫る高齡を以て四国に流さるる祖師と、越の白雪を踏みわけて、関東の曠野より種を蒔き初めし絶体他力本願の開山はこれから起った——わが安楽房遼西は、この破局の口火を切った行者で、同時に新宗教の祭壇に供えられたる一箇可憐の小羊である。而してその裏は後鳥羽院の寵姫松虫鈴虫となん呼ぶ恥かしき美人の発心であつた。……歴史及び記録の教うるままに、その間の消息を脚本様の形式に書いて見たに過ぎないのである。」設定は「建永元年秋より、建暦元年夏」とあり、登場人物は、鈴虫の局（十七歳）、松虫の局（十九歳）、安楽房（三十歳）、住蓮房（三十九歳）、法然上人（七十五歳）、検非違使の官人秀能（中年）、追立の官人周防判官元

国(同)、同伊賀判官末貞(同)、江口の遊女文珠(二十歳)、叡山の悪僧剛実(中年)、藤中納言光親(若き公卿)、同従者侍女若干、検非違使配下若干、士農工商若干、法然流罪の一行若干、衛士若干、となっている。

最後は、遊女文珠が笹につけた鬨腰を取り上げて高く捧げ、「ああ、これこそ、六條河原にて、首斬られたる安楽房が鬨腰よ、魂は浄土に迎えられたれど、骨は国法の罪科逃れ難し、野山に曝さるる浅ましさに、拾い取りて、首にかけ、笹にかけて、供養せしが、幸、ここは石清水の正八幡、今一たびの御赦免を祈り進らせん」と叱び、鬨腰を社前の方に向けて跪き何をか祈りて後、「おお有難や、御赦免の御沙汰、雨も止め、風も静まれ、人々物の用意して、法然上人を都に迎え進らせよ！」と絶叫、文珠鬨腰を高く捧げ、走らんとし倒る、電光風雨、

となっている。

○『黒谷夜話』は大正十年の著述を、翌十二年十月号の『女性改造』から連載、十二年六月号まで続いたものである。十三年には磯部甲陽堂から刊行され、昭和六年にも隣人之友社から再刊された。また昭和二十五年六月には、講談師宝井馬琴によってNHKラジオで放送されている。この作品を介山自身、冷汗をかかずに読める唯一のもの、と語った話は前述したが、橋本先生は次のように解説している。

「介山の自信のとおり、構成と叙述ともに会心の作品と呼ぶに足りる。武士の熊谷次郎直実、盗賊の天野の四郎、恋の女性たる手越の長者の女、室の遊女、これらが東から西から黒谷の法然上人の念仏にひき寄せられる必然性がみごとに構成されている。介山にとって浄土信仰の念

仏は、"夢のような、楽しいような、なつかしいような、そうかといって、怖ろしいような、おごそかなような、複雑した感情にゆすられる"ものであった。そして、"手越の長者の女はいかに、熊谷、小兵太と共に東へも帰らず、少将殿と共に出家遁世の途に出でたとも思われ"ず室の遊女となったというところに、介山の女性観がはっきりと出ているのである。]

○『法然』昭和六年六月、三省堂より単行本として発刊。口絵一、写真七葉、序、三二〇頁、一円五十銭。内容は、唯一の創立者・「勅修御伝」要訳（一名法然上人行状絵図）・法然の誕生及び幼時・修行・入信・立案及布教・迫害と晩年・死後と法脈、などの章から成るが、この中、勅修御伝要約は、二年後の昭和八年十月、大菩薩峠刊行会から単行本『法然行伝』

となって出刊されている（次項紹介）。この書は驚くべき法然上人研鑽の書であって、端的にいわせてもらうならば、宗乗学者も宗教学者も顔負けの大法然論である。例えば、法然上人こそ「底の知れない器と腹とを持っている人」と語り、日本ではほんとうに「一宗教を創立したのは法然上人以外にいない」といい、親鸞は勿論、日蓮もまた法然の法脈を継ぐものである、と断じている。後年、学者によってこれと同旨の論が発表され（増谷文雄・家永三郎など）、それらは全く斬新な学論として注目されたのであるが、じつは介山がすでに、昭和初年の時点で喝破していたことなのである。介山の炯眼、学びの深さ、ただものではなく、敬服するのみである。これらについての詳論は後述する。

○『法然行伝』右述のとおり、すでに昭和

六年刊『法然』中に所収のものであるが、同八年八月、大菩薩峠刊行会から発行されたもので、『法然』中の「勅修御伝要訳（一名法然上人行状絵図）」をそのまま単行本にし、『法然行伝』としたものである。勅修御伝というのは、御伏見上皇の勅命で編纂された、最も広大にしてよく整った法然上人伝であるが（詳しくは『法然上人行状絵図』という）、四十八巻から成るので『四十八巻伝』とも略称される。介山はその四十八巻を忠実に現代語訳化したのであって、介山こそまさに勅修御伝現代語訳の最初の人なのである。浄土宗は、介山のこの労作に対し、もっと目を向けるべきであろう。たとえば若い僧侶方の勉強読本としても最適のものと考える。

以上、中里介山の法然上人に関する著述を一覧したのですが、介山はこのほかに

も、法然上人讃仰の講演などもしているのがあります。それは、昭和七年四月六日には法然上人生誕八百年祭で岡山公会堂において「大いなる人」と題して講演、同月二十五日には東京小石川伝通会館が「法然上人と現代人の悩み」と題して講演しております。後者は『法然行伝』にその講演記録が付されております。また昭和十年春には、法然上人讃仰会の招きで東京谷中真島町の緑風荘内「山の家」で、増上寺法主大島徹水大僧正・佐藤賢順先生らと、法然上人について語っております。さらに同十二年三月には、京都知恩院主催の浄土宗三高僧遠忌に因んで、京都朝日会館で講演しております。

（つづく）

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 十月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十三年九月二十五日 印刷
昭和六十三年十月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六
発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

古今俳句の鑑賞

『採 芳 巡 礼』

島根大学名誉教授

伊 澤 元 美 著

◎「俳句」とは何か——芭蕉から山頭火まで、縦横に俳句史の世界を巡りつづけて五十有余年、近代文学研究の手法での批評活動の基底にある想いを江戸から現代の俳人たちの名句を通して語る。俳句の一語一音の意味と形式を優しく、そして鋭く解き明かしてくれる。

B 6 判 一六七ページ 定価二〇〇〇円

△発行・発売▽ キ ュ ー ブ 社

〒162 東京都新宿区市谷本村町二―三三―二〇一

振替(東京)四―三六五六―一 電話(〇三)二六八一―八六七

第五十四卷

十月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十二年九月二十五日印刷 昭和六十二年十月一日発行